

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19560655

研究課題名(和文) 開港地神戸に見る洋家具業発祥の経緯と伝統技術によるサステナブルデザインの可能性

研究課題名(英文) The History of the “Kobe-Kagu” (Western-Style Furniture in Japan) and the Trial Production for the Sustainable Design using these Traditional Construction-Techniques.

研究代表者

佐野 浩三 (SANO HIROZO)

神戸芸術工科大学・デザイン学部・教授

研究者番号：50258175

研究成果の概要 (和文)：

開港前後に誕生した日本洋家具発祥の一つである「神戸家具」は、唯一現代に継承される希少な地場産業であり、「生きている近代化遺産」とも言える。今日まで系統的に記された機会の無かった戦前の歴史を4期に分け概要をまとめた。また、今日他ではほとんど見られなくなった、独特の高い技術である膠(にかわ)による接着および、ほぞ接合の技術についてまとめた。

後半では、「神戸家具」の伝統的技術を用いた数脚の椅子の試作を通して、今日の消耗品化する傾向にある「雑貨の家具」とは対極にある無垢木材による修理可能で半永久的な強度を実現している家具の今日的な可能性を探っている。

研究成果の概要 (英文)：

In Kobe, during the time of opening the ports to the West, western-style furniture appeared. This style of furniture is called “Kobe-Kagu”. As the “Kobe-Kagu” furniture is still produced today, one can refer to it as the living inheritance of Japanese modernization. Although the “Kobe-Kagu” has a long history, much of it was never recorded. We divided the history before WW II into four periods and we wrote a specific outline. The history of the “Kobe-Kagu” is long and the technical skills developed along the way are very sophisticated and special. This is an outline of some of the techniques involved, found only in Kobe, such as gluing the parts together or the connecting of parts without using glue or nails.

In the second half of the research, we report about the trial production of several chairs using the traditional techniques of “Kobe-Kagu”.

The resulting chair is just the opposite of the mass-consumption goods of today. They can be easily repaired and maintains a lasting strength. These trial productions show the potential of “Kobe-Kagu” furniture today.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：インテリアデザイン、家具デザイン

科研費の分科・細目：建築学・建築史、意匠

キーワード：家具、地場産業、サステイナブルデザイン、開港文化、伝統技術

1. 研究開始当初の背景

幕末から明治初期の開港期に誕生した「神戸家具」と称される産業は、「東京芝家具」、「横浜家具」と並んで、日本の洋家具産業の原点の一つである。「東京芝家具」は、政府の外交上の需要に直結した産業であり、「横浜家具」と「神戸家具」は、開港地での居留地などの実用的な需要から誕生した産業である。この中でも「神戸家具」は、ある産業規模を持って発祥期から現代にまで継承される希少な産業であり、数件の小さい規模の店舗ながら、受注を中心に分業化された固有の環境で欧風クラシック意匠の家具製作を続けている。中には明治初期に創業し、店舗の歴史が日本の洋家具の歴史ともいえる老舗もあるが、その2店の内1店は2005年に一時廃業するなど産業全体の存続が危ぶまれている。

明治期の空間の洋風化における総合的な建築意匠研究は優秀な研究が蓄積されているが、「東京芝家具」以外の室内意匠や家具研究はまだまだ手つかずの領域が多い。「神戸家具」においても本研究までその歴史を系統的、実証的に編纂した機会も無く、現存する直接的な資料は皆無に近い。これまでの基礎研究から、その技術は西日本の空間の洋風化を支え

る基盤を確立していたことが理解できるため、より具体的な調査を進めることにより建築意匠史の補完や他の家具産業との関連研究など、周辺分野の資料ともなる研究の端緒となると考えた。

2. 研究の目的

当研究は、以前の基礎調査の結果から、成果が確実に期待できる研究項目を重点に置いて、周辺に調査の範囲を広げながら研究を進めた。本研究の中心的な目的は、神戸の洋家具産業を事例として、室内意匠研究の根幹でありながら空白部分となっている産業発祥からの変遷を俯瞰できる資料を作成することである。具体的には、以下の2点を調査の切り口とした。

(1) 開港期における発祥の経緯を中心とした「神戸家具」産業の歴史の変遷

(2) 明治後期に定着したと考えられる、半永久的な強度で修理可能な木工技術の記録と今日的なサステイナブルデザインの可能性

木工技術の今日的可能性については、現実的な試作を通じて実践的側面を重視したアプローチを試みた。

3. 研究の方法

具体的には、先述した以下の2点を調査の切り口とした。

(1) 開港期における発祥の経緯を中心とした「神戸家具」産業の歴史の変遷

(2) 明治後期に定着したと考えられる、半永久的な強度で修理可能な木工技術の記録と今日的なサステナブルデザインの可能性

(1) については、史料が非常に乏しいため、各方面でかろうじて語り継がれている系譜を収集することが最も重要で、まず行うべき調査である。この聞き取り調査を骨格として周辺史料を用い事実関係を具体的に補完し、肉付けする作業が中心となる。特に黎明期の技術の源泉ともいえる塩飽大工が、神戸で洋家具産業を起す経緯については、伝説的な逸話が多く詳細が不明であった。塩飽の人々は、十六世紀後半から「人名（にんみょう）」という特別な自治権を与えられ、高度な航海・操船技術、造船技術を蓄積し、「岡大工」としても、国宝・吉備津神社本殿をはじめ多くの社寺建築を残した特殊な技術集団であった。その理由から幕府遣米使節随伴艦咸臨丸は、乗組員50人中35人が塩飽の出身であり、その小頭であった大熊実次郎は、後に神戸・川崎町で帆船の造船所を営んだ。「神戸家具」の祖とされる塩飽出身の真木徳助や溝淵和太郎、木本悦次郎は、この大熊実次郎に連なる者であった。また、道具商から洋家具製造業に発展した事例も「永田良介商店」を調査対象としてその経緯をまとめた。



図1 『豪商神兵湊の魁』明治15年・航洋造船所 大隈實（大熊実次郎）



図2 『豪商神兵湊の魁』明治15年・「西洋大工業」 木本悦次郎

産業の成長期は、1902（明治35）年に京都高等工芸学校が設立され、武田五一や本野精吾のもとで専門教育を受けた卒業生の影響も大きい。京都工芸繊維大学美術工芸資料館に残された第一世代の「図案家」や「室内装飾家」の学生作品資料からは、当時の先端の意匠情報を提供していたことが理解できる。

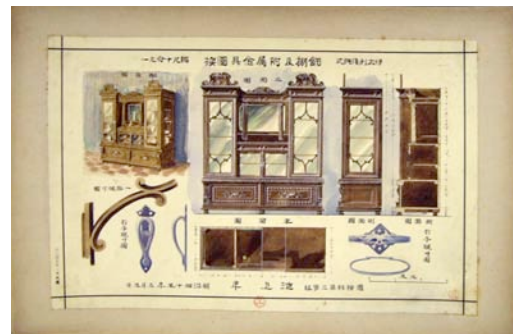


図3 池上年(1912卒)家具課題作品 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵



図4 吉田悦蔵邸（ヴォーリス建築1914）の家具

(2) については、「神戸家具」の伝統技術は木曾一（東京高等工芸学校教授）が大正9年に著した『木材の加工及び仕上』にある内容とほぼ同様の技術、道具を用いており、明治後期から大正初期のこの時期に定着した技術を継承していると考えられる。その自然素材に精通したオーダーメイドの技術は量産技術にはない可能性を持っている。基本的に「モデルの更新」という概念がないためスタイリングを長期間保つことが可能である。

人から人へ直接的に伝承される、これらの伝統産業は後継者不足から途絶えがちであり早急に記録に残す必要がある。椅子の製作を例にとれば、木地、削（く）り、彫刻、塗装、張りの各工程の各専門職が独立しており、複数の会社を通過して完成に至る特徴的な産業構造を持っている。特に、無垢木材・ほぞ組・膠（にかわ）接着・砥粉（着色・下地・目止め）・ワックス仕上げといった木工技術は家具製作の原点であり、神戸洋家具業界と協力し、過去の「神戸家具」の構造、各部材の寸法、接合方法（仕口）、接着剤（膠）の強度、道具等のデータを収集すると共に、伝承の危機にある具体的な製作課程を記録した。

木工技術の今日的可能性については、現実的な試作を通じた実践的側面を重視したアプローチを試みた。

4. 研究成果

開国以来の洋家具産業の歴史は、洋風化政策を進める政府の需要を取り込み成立した「東京芝家具」を中心的系譜として語られ、研究の対象となり情報も蓄積されてきた。開港地の洋家具産業は、外国人が持ち込んだ洋家具の修理や再生販売を起源とする実用的な需要から発生し、黎明期の「東京芝家具」も横浜や神戸を手本として、技術の習得のために出

向いていた。しかし、横浜や神戸の洋家具産業は、自然災害や戦争によって情報が散逸したままになっており、開港当時から最前線で室内装飾や家具製作に携わった発祥産業の記録は、室内意匠研究の根幹でありながらほとんど残されていないのが実状である。特に「神戸家具」産業は、その歴史を系統的、実証的に編纂した調査記録はなく、平成12年の神戸市史も4000字程度の記述にとどまっている。第二次世界大戦中の空襲によって店舗や工場とともに図面や写真、台帳などの資料の大半が焼失している上に、阪神淡路大震災によって、さらに散逸を招いたことが、その大きな理由であろうが、このまま放置すれば文化的に大きな損失を招くことは必至である。人的資料を考慮しても、調査は時期的に危機的状況にあると言わざるを得ない。意匠史、建築史研究においても空白域であり、本研究の重要性は高いと考える。木工技術においても、今日ではほとんど見られない、膠（にかわ）による接着および、ほぞ接合の熟練技術の記録は学術的にも産業的にも貴重な記録になるであろう。また、サステイナブルデザインの視点からの試作を通じた実践的側面を重視したアプローチは、研究の当産業へのフィードバックの機会となった。

(1) 開港期における発祥の経緯を中心とした「神戸家具」産業の歴史の変遷について

系統的にその歴史がまとめられた機会がなく、第二次世界大戦や阪神淡路大震災で資料はより乏しくなっているため、時系列的な事実関係の調査によって、不明な点が多い戦前の歴史の骨格を開港期の産業発祥から昭和初期までを中心に整理した。その結果から、「神戸家具」に関する年表を作成し、戦前の歴史を4期（黎明期、模索期、成長期、成熟期）に分け、概要をまとめた。



図5 英国へ送るカップボード 1906年 永田良介商店



図6 雲仙観光ホテル ダイニングボード 1935年 永田良介商店



図7 雲仙観光ホテル ダイニングルーム 1935年 (家具は1961年に入替) 永田良介商店

(2) 明治後期に定着した、半永久的な強度で修理可能な木工技術の記録

「神戸家具」の伝統技術である「膠着」(天然素材のにかわによる接着技術)と「ほぞ接合」(木工技術の継ぎ手の種類)に重点を置き、膠鍋などの道具の検証も並行しながら、その特徴をまとめた。また、特徴的な製作工程も記録した。

第三百三十七圖

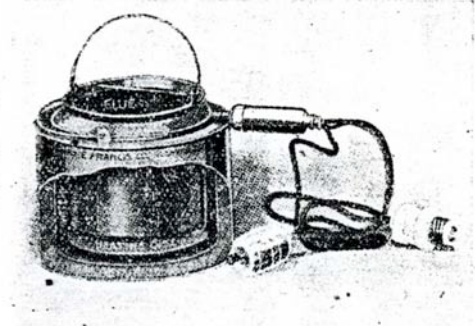


図8 膠鍋『木材の加工及仕上』木村恕一 1920年 博文館



図9 インセットウォーマーを用いて復刻した膠鍋

(3) 「神戸家具」の技術を用いた、サステイナブルデザインのための椅子の試作

各方面の協力により、商品レベルに達した計5点の試作が完成し、当初の計画を遙かに上回る結果が得られた。市場性や使用検証は今後の課題となるが、今後の研究につながる大きな布石となった。

①伝統技術を用いながら今日のライフスタイルを考慮した試作

(図10: 試作A、図11: 試作B 佐野)

②伝統的技術から逸脱した現代的な取まりを用い、「日本の洋家具」を意識した試作

(図12: 試作C 佐野)

③家具作家の視点から可能性を模索する試み

(図13: 試作D、図14: 試作E 安森)

※制作まで安森が担当

以上、三段階の条件を設定して行った。



図10 試作A(伝統技術を用いた小椅子 ナラ材 佐野)



図13 試作D(飾り椅子のリデザイン ナラ材 安森)



図11 試作B(伝統技術を用いた体格に合わせて作る
イージーチェア ナラ材 墨染め 佐野)



図14 試作E(木彫りの装飾を用いた現代的な構造の
小椅子 ナラ材 安森)



図12 試作C(現代的イメージの小椅子 ブナ材 佐野)

以上の成果のうち、公開可能な内容については冊子にまとめ関係各所に配布すると共に、ホームページで公開の準備を進めている。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐野 浩三 (SANO HIROZO)

神戸芸術工科大学・デザイン学部・教授

研究者番号：50258175

(2) 研究分担者

安森 弘昌 (YASUMORI HIROMASA)

神戸芸術工科大学・先端芸術学部・准教授

研究者番号：20341018